

石造狒犬の類型と分布に関する野外調査を主とした  
網羅的研究 -岩手県の石造狒犬を事例として-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2023-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川野, 明正 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/00023048">http://hdl.handle.net/10291/00023048</a>

石造狒犬の類型と分布に関する野外調査を主とした  
網羅的研究

— 岩手県の石造狒犬を事例として —

川 野 明 正

## A Comprehensive Study on the Typology and Distribution of Komainu (stone guardian dogs): A Trial of Typological Classification Using the Case of the Iwate Prefecture Stone Komainu as a Case Study

KAWANO Akimasa

This article is a part of field research results of the project funded by the Institute of Humanities, Meiji University, Special Research Fund I, “A Comprehensive Study of the Types and Distribution of Stone Komainu (Stone Guardian Dogs),” (PI: Akimasa Kawano, Special Research, FY2021, grant amount: 1,470,000 yen).

Komainu is a kind of sacred animal in Japan. This work is a routine attempt at a typological classification of Komainu as no related work of such research has been conducted before.

This article is divided into two parts, the first part introduces the classification method. The author has been engaged in typological research on lion statues in East Asia and based on this experience, he applies the typological classification method for Chinese lion statues to the typological classification of Komainu and modifies it to fit the actual situation in Japan.

This article is an application of the research results of the types and distribution obtained in the regional type of study of Chinese lions and Okinawan guardian lions (Shisa) to the stone Komainu, aiming to provide a scientific name for comparison and reference for the statues of East Asian lion. The naming conventions are shown as follows: region + set location + morphological characteristics + posture + material + name of the scared animal (Komainu). The naming conventions are based on 17 principles for each of the abovementioned orders of notation.

The latter part of the article discusses the regional typology of Komainu, using Iwate Prefecture as an example. Thirteen regional types are counted according to the abovementioned rules, and their morphological characteristics and distribution are discussed in this article. For each type of Komainu, we have described the oldest type, the original type, the influence, and the distribution limits of each type. Moreover, the branches of them are also described as much as possible and are classified according to differences in the shape of their ears and tails, as well as in their posture such as the direction of their necks, and their distribution in the prefecture is also listed.

In addition, this article has also discussed other scared animal statues focusing on Komainu in Iwate Prefecture, including non-stone Komainu (iron, ceramic, and mortar made Komainu), two types of sacred animal statues (stone lion heads and stone wolves), and eight pairs of isolated examples of Komainu made according to the original ideas and images of stonemasons.

# 石造狒犬の類型と分布に関する野外調査を主とした 網羅的研究

— 岩手県の石造狒犬を事例として —

川 野 明 正

## 1. 本論執筆の動機と課題

本論は研究題目：明治大学人文科学研究所特別研究費第1種「石造狒犬の類型と分布に関する野外調査を主とした網羅的研究」（研究代表者：川野明正・特別研究・2021年度・交付額：1,470千円）による実地調査研究の成果の一部を取り上げたものである。一部である理由は、本研究は日本全国の実地調査を実施しており、全容を記すことは、論文の規定字幅を大幅に越えるからである。各県別の石造狒犬の類型と分布は、今後『明治大学教養論集』に連載し、併せ2024年刊行予定の『狒犬—ものと人間の文化史』（法政大学出版局）に県別類型研究の成果を掲載することで対応する。

石造狒犬の研究については、戦後に本格的な研究が着手されたばかりで歴史が浅い。石造物研究は、そのほとんどのジャンルが川勝政太郎によってはじめられたが、川勝政太郎は「石造狒犬の系列」で、畿内及び北陸の石造狒犬の系列を取り上げている。これが石造狒犬の類型についての先駆的な業績である〔川勝 1965〕。また嘉津山清氏が「石造狒犬概説」で、石造狒犬の古遺品につき、全国に及ぶ概説をされ、全国的な狒犬の分布について、基礎的な概観を提示されている〔嘉津山 1982〕<sup>(1)</sup>。

その後、全国の類型を紹介した初歩的な文献としては、三遊亭円丈（編）『THE 狒犬!コレクション—参道狒犬大図鑑』やたくきよしみつ氏の著作『狒犬かがみ』と『新・狒犬学』などがある〔三遊亭 1995; たくき 2006; 2020〕。殊にたくき氏は、その分類に必要な要素を論じており、HP『狒犬ネット』に「狒犬分類学」の章を掲載し、全国の主要狒犬の分類を提示する〔たくき HPa〕<https://komainu.net/bunrui0.htm>。石造狒犬の分類について、大類型を「全体の形と出自による分類」とし、分布地域・出自・原型などによる分類要素を挙げ、小類型を「属性による小分類」とし、材料・構図・附属物・形態上の諸特徴の諸要素などを小類型の分類要素に挙げる。これら諸要素は、石造狒犬の分類においても有効である。

以上の先行研究を踏まえた上で、石造狒犬の類型研究は、現状では全国的な石造狒犬の類型は、全国的な分布を踏査してまとめた研究がまだ出ていないことが喫緊の課題である。その上で材料・姿態・

附属物・形態上の諸特徴の諸要素を有機的かつ合理的に結合した分類法の命名規則化と個別類型への運用を実施する必要がある。

たとえば、従来言われる類型で「はじめ」という呼称がある。江戸前期の素朴なスタイル全般を指す類型呼称であるが、四肢に彫り貫きがない狛犬も、彫り貫きがある狛犬も一括りに「はじめ」「江戸はじめ」などと呼ぶことは、類型分類の基準とならない。「はじめ」のように、定義が曖昧で問題のある呼称、つまり、類型呼称を成し得るべくもない呼称を採用するより、まずは地域別の狛犬の分類をした上で、個別の地域類型の特徴として明確にすべきである。それゆえ、全国的な踏査が必要なのである。その上で、長胴・附尾といった工具の発展水準から来る彫刻技術が反映される特徴から類型名称を命名するべきと思われ、本論では「遠野型長胴附尾（石造）狛犬」というように、「地域＋形態的特徴＋（姿勢）＋材質＋霊獣名（狛犬）」の命名規則を立て、「はじめ」に相当する類型を扱う（ただし、本論は石造狛犬を主題とするので、石造狛犬の具体例については、とくに「石造」とは記さない・第2章の命名方針のサ項に後述）。

いずれにしても現在の石造狛犬研究において、全国規模で各地域ごとに詳細に石造狛犬の類型を網羅した研究成果はまだなく、類型命名法の原則を考案・定立する研究が要請される。

上記を踏まえ、石造狛犬の全国的な網羅的な類型研究の必要について、以下の理由を挙げる。

ア. 全国の各地各様の石造狛犬は、地域特有の石造狛犬の形があり、これをまず類型としてまとめる必要があり、多種多様な石造狛犬の形について、見通しを与える必要がある。

イ. 石工毎に制作される石造狛犬の形態の相違について、当の石工が近接地域から、複数種の石造狛犬の類型の影響と近隣地域の石工の作例の影響を受けるなどして石造狛犬の制作を行う場合も多い（たとえば岡山県内の石造狛犬にこの傾向は顕著にみられる）[cf. 藤原 2013]。この場合、同一石工制作の石造狛犬に、他地の多種多様な石造狛犬類型の影響が認められる。

この2点からしても、石造狛犬の類型把握は、やはり基礎研究として必要不可欠な作業であるといえる。

ただし、石造狛犬は個性溢れる孤例も多く、すべての石造狛犬を類型に分類することは、余計かつ過剰な対応で、杓子定規の批判を招きかねない。類型は、あくまでも石造狛犬を見る枠組、つまり「地」から「図」を浮き上がらせる見方として扱うべきであり、作業仮説的な性質はつねに考慮する必要がある。極論に拘泥した類型分析の手法は逆に像容の個性や独自性への認識を削ぎかねない。

前述のように、全国的に網羅して石造狛犬の類型を調査した先行研究は未だにない。その理由は以下の点が考えられる。

ア. 全国的な踏査による石造狛犬の類型把握という研究活動自体が困難であること。また、石造狛犬の分布は、台湾等、旧大日本帝国植民地にも及ぶこと。

イ. 石造狛犬の分布は、各地域での都道府県単位、あるいは台湾における現存石造狛犬の悉皆調査を実施して、銘の判読から石造狛犬の奉納年と制作石工名が明確になることで、はじめて細かな類型とその分布が確定できるという事情がある<sup>(2)</sup>。また、石造狛犬は無銘の作例も多く、造立に関する情報が不足するものも多い。

ウ. 各地域での石造狛犬研究者の調査研究に、連携と総合的視点からの概括が必要であるが、総合化の試みがまだなされていない。地域を越えた学術交流が必要である。

これらの理由により、全国的な石造狛犬の類型把握は、当面道遠い課題でありつづける。各地の石造物研究者の、石造狛犬を対象とした悉皆調査による研究成果が全国規模で通覧できるまでには、今世紀の時間では不可能に近い。まずもっては基礎研究として、石造狛犬の地域類型について、およその見取り図を描くことが、限界は当然としても、必要とされる。後続研究の修正を俟つことは当然にしても、まずはかかる基礎研究を遂行する意義はあるだろう。

本論は、岩手県内の石造狛犬を取り上げ、県内地域毎に形態上把握可能な石造狛犬の類型を上位類型として提示する。実際に全国46都道府県と台湾で、同様の類型把握調査を実施した。

ところで、石造狛犬類型把握の試みに当たり直面する困難に、類型名称の命名規則をいかに定立するかという問題がある。私はこれまで、アジア各地域の獅子像の類型分類調査を進め、中国獅子像の地域類型と沖縄村落守護シーサーの類型名称を規則化している（「中国獅子像の地方類型と分布（その1）北獅篇」・「中国獅子像の地方類型と分布（その2）南獅篇」・「沖縄村落守護シーサーの類型分類と地域分布—シナ海石造獅子・狗犬文化圏の比較研究（4）」）[川野 2017; 2018; 2021]。これらの研究は、この種の類型名称が中国・沖縄の獅子像では、具体的な命名法則を創出した先行研究が従来ないために必要とされた研究であった。ただ、中国獅子での慣例的な類型の呼称は、「地域+材質+霊獣名（獅子）」に概ね沿い、これに設置場所・形態的特徴・姿勢の要素を加えることで類型上の命名規則も基準化でき・定立し易い。対して、石造狛犬の類型名称は、先行研究の蓄積から、既存の様々な名称があり、研究者各自の命名に依る。全国的に統一した命名規則はない。

石造狛犬は類型名称が未確定の地域も多い（岩手県内の石造狛犬も同様の事情である）。それ故、先行研究で確立された合理的かつ学術的な呼称以外は、命名規則を合理的に考案する必要がある。かかる事情から、敢えて以下の命名方針を考案した。

## 2. 地域類型の命名方針

類型名称は以下の命名規則に基づくものとした。なお、庚申塔や石造狛犬は初造の作例を以って類型名称とする事例もあるが、石造狛犬は紀年銘の無い作例が多く、この方式は採らない。

ア. 石造狛犬の類型名称は、中国獅子・沖縄村落守護シーサーと異なり、すでに学術用語として提唱

された名称も多く、とくに問題がない限り、先行研究の命名を踏襲する（例、「笏谷石製石造狛犬」〔長坂 1989〕<sup>(3)</sup>）。

イ. 表記順 = 「地域 + (設置場所) + 形態的特徴 + (姿勢) + 材質 + 霊獣名 = 狛犬」の順に表記する（設置場所〈殊に参道・神殿〉と姿勢〈殊に蹲踞〉は、すべての類型に涉り記すと煩瑣であるので、必要な場合のみに止める・後述）。この命名法は中国獅子の命名法を参考とした。中国獅子は「地域 + 設置場所 + 姿勢 + 材質 + 霊獣名（獅子）」の順に類型名称を規則化でき（例、「廣東梁坊立石獅」〔川野 2018〕、沖縄村落守護シーサーは、村落周囲の設置が原則で設置場所の表記を不要とする以外、この命名法を踏襲することができる（例、「宜野湾市喜友名型立〈たち〉石獅子」）〔川野 2021〕）。

日本の石造狛犬においても、概ねこの表記順が通用できよう。石造狛犬も地域を冒頭に、材質を霊獣名（狛犬）の直前に置くのは、たとえば山下立氏が「丹後半島型石造狛犬」と命名するように〔山下 2022c〕、基本的な表記順であり、間に類型を成す形態的特徴・姿勢などの諸要素を挟むのが合理的な命名となろう。

かかる命名法は、中国・沖縄獅子とも基本的な表記規則を共有し、東アジア各地の獅子系霊獣像に相互参照・通用可能な命名となり、比較研究に資し、学術的展望を拓く効果を有すると考える。

ウ. 下位類型の扱いと表記 = 下位類型の分類表記として、姿勢の違い（首の向きなど）や地域毎の形態の違いは、顕著な相違を取り上げて〈 〉内に記し、さらに下位分類が必要な場合は〈 〉を再び後置する。つまり下位類型は括弧内表記とし、それを連ねることで、類型上の階層を合理的に表記できよう。

エ. 設置場所 = 中国獅子の類型名称で表記する設置場所は、狛犬では神殿・神門などの場所がある。香川県西讃地方や福岡県南部・島根県松江市周辺など、神門狛犬が分布する地域の呼称は、適宜設置場所を地域名称に続き表記することが望ましい（例、「筑後型神門石造狛犬」）。参道と神殿は、設置場所の記載は慣例からしても煩瑣であり記載しないが（例、神殿狛犬である「肥前狛犬」）、両種とも併せ存在する地域は、参道・神殿の区別を類型名称に表記する場合がある。

オ. 地域(1) = 最上位の類型範疇は、分布地域である。表記順は冒頭に地域名を冠することが望ましい。

カ. 地域(2) = 同一地域2種以上の類型が並存する場合、Ⅰ・Ⅱとして表記して弁別する（例、札幌型狛犬Ⅰ〈山崎型〉・札幌型狛犬Ⅱ〈鎬城型〉）。

キ. 地域(3) = 地域名は旧国名を使用できるだけの分布範囲が該当の石造狛犬にあれば、旧国名が望ましい（例、「肥前狛犬」）。もちろん、旧国名より狭い範囲での分布も多い。たとえば、岩手県はかつて陸奥国に属した地域で、今の福島県・宮城県・青森県も陸奥国に属する。そのため、旧国名を使

用せず、県内各地に分布する場合は、県名表記が適切な場合もある。さらに県内の諸地域に限定して石造狒犬が分布する場合は、市町村名を表記する。

なお、旧国名を冒頭表記する場合は、明治期以降制作された石造狒犬についても、原則旧国名を当てる。江戸時代やそれ以前との地域の石造狒犬との継続性を重視する目的からの措置である。

ク. 地域(4) = 特定地域を源流とせず、全国に分布する狒犬の類型は、特定地域ではなく、全国規模の項目を立て、地方類型とせずに類型を表記する (例. 『『諸職画鑑』型宝珠・枝角逆載〈のせ〉狒犬』)。

ケ. 形態的特徴 = 顕著な形態的特徴は狒犬の類型分類の指標とする。該当石造狒犬に、著しい形態的特徴がある場合は適宜、名称を付加する。たとえば、頭に宝珠・角を載せる場合である (例. 「盛岡型宝珠・枝角載附尾狒犬」)。また、尾の形態は江戸周辺の石造狒犬では、時代順に「附尾」(つきお)「立尾」「流尾」に分かれ、形態特徴の指標となる。なお、附尾狒犬は、長胴が多く、長胴でない附尾狒犬と区別し、「長胴附尾狒犬」とした。

コ. 姿勢(1) = たとえば四足立ちの石造狒犬は、「立狒犬」(たちこまいぬ)、尻上がり姿勢の石造狒犬は「構え狒犬」と表記し、類型の弁別指標とする。石造狒犬は、大多数が蹲踞(そんきょ・座型)の姿勢を採るため、殊に蹲踞姿勢が際立つ類型である場合や、蹲踞以外の類型が同一地域にある場合のみ、敢えて蹲踞と記し、無表記の場合は蹲踞狒犬である (相当のすべての類型に「蹲踞狒犬」とすると、くど過ぎる点が否めない) (例. 「一閃型蹲踞狒犬」)。立狒犬の場合は、材質を入れる場合は、たとえば「陶造立狒犬」などと表記し、姿勢と材質の順を読み易く入れ替える。

サ. 材質 = 石造狒犬の材質名である「石造」は表記することができるとはいえ、本論は石造狒犬についての論著であることが表題に明記されており、煩瑣になるため、石造狒犬の個別例については、とくに「石造」とは記さない。他の材質の狒犬を附記する必要がある場合は、「木造」「陶造」「鉄造」など、材質名を記す。

シ. 石工(1) = 石造狒犬の形態的相違は、石工乃至工房の制作による特徴であることが多く、その場合は石工名等を適宜表記する。また、下位類型を鑑別する際は、石工乃至工房による特徴からの鑑別となることが多いが、石工独自の造り出した特徴が著しい石造狒犬は、そのまま上位類型に表記する (1人の石工の制作物であっても、その形態が類似し、分布が広範である場合、類型として扱う。たとえば、江戸後期の畿内の石工丹波佐吉〈1816-?〉の石造狒犬は、独自の形態である)。また、北海道など、地域の石造狒犬の制作者が、同一石工とその影響を受けた石工の同類型の制作物でほぼ占められる場合は、類型名称に、石工の姓を表記することが妥当である [丸浦 2007] (ただし、岩手県下の石造狒犬は、石工・工房不明が多く、工房・石工毎の特徴からの鑑別が困難である)。

いずれにせよ、本研究は、まずは石造狒犬の全国的な地域類型を上位範疇として描き出すことに

注力するものであり、下位範疇の類型設定は、今後の調査の進展に待つ（岩手県内では、石工名を記す上位類型はない）。

ス. 石工(2) = 上記の如く、狛犬間の全体的な形態に関して2人以上の石工の間に明白な影響関係がある場合、類型として扱う。

セ. 附記(1) = 石造狛犬以外の狛犬を附記として挙げる（例. 「附記. 遠野型陶造狛犬」）。

ソ. 附記(2) = 神使像（石狼・石狐・石猿・石蛇など）は、狛犬ではないが、石狼は狛犬と比較的類縁性が高く、とくに附記に挙げる。ただし、狼像はそれ自体が研究対象として膨大な地域例があり、別個の研究領域であり、限定的に扱うのが適切と思われる。

タ. 附記(3) = その他各地域には、特筆すべき霊獣像がある。たとえば、岩手県内の独特な石造物に、石造獅子頭（「石造権現さま」）があるが、獅子の類なので、附記に挙げる。

チ. 孤例 = 類型分類不可能で個性際立つ石造狛犬は孤例とする。

### 3. 調査の概要

岩手県内の石造狛犬の類型と分布について本論文でとくに取り上げる理由は、このテーマについて、1つの典型となりうる地域であるからである。岩手県は内陸南部（一関市・奥州市・平泉町）を除けば概ね盆地ごとに地域が限られ、石工の活動も、盆地毎に展開される。岩手県内の石造狛犬は、大抵の場合、盆地毎に類型の明確な把握が可能である。

本論文は、以下の調査を基にしている。なお、訪問地は1日に10箇所から20箇所に及ぶため、代表的な訪問地を1カ所のみ挙げた。

第1回. 調査題目：青森県・岩手県石造狛犬調査

調査期間：2021年4月10日～4月14日

調査地と成果：青森県弘前市岩木山神社（成果:玉垣倒立狛犬の全国分布と該狛犬造立年代確定）・青森県五所川原市八幡宮（成果:津軽型立狛犬の分布の把握）・青森市内内観音堂（金木山神社）（成果：笏谷石製狛犬の青森県内の分布確定）・岩手県盛岡市盛岡天満宮（成果:盛岡市内の狛犬分布の把握）

第2回. 調査題目：山形県・秋田県・岩手県石造狛犬調査

調査期間：2021年5月24日～6月2日

調査地と成果：山形県米沢市古峯神社（成果：米沢市内最古の狛犬の記銘判読）・秋田県能代市八幡宮（成果：浪花狛犬の伝播時期の確認）・秋田県秋田市八幡宮（成果：羽後型狛犬の分布把握・製作期間の確定）・岩手県二戸市呑香稲荷神社（成果：二戸・一戸型立狛犬の分布把握と石工名の解説）・岩手県宮古市赤前八幡宮（成果：宮古型狛犬の分布把握と石工名の解説・建立年確定）・岩手県遠野市松崎観音堂（成果：遠野型長胴附尾狛犬の分布把握と石工名の解説・建立年確定）・岩手県大船渡市熊野神社・岩手県陸前高田市竹駒神社（以上成果：気仙型狛犬の分布把握と形態変遷と時期の確定）・岩手県一関市正八幡宮（成果：一関・平泉・奥州型長胴狛犬の分布把握）

### 第3回. 調査題目：岩手県・秋田県・宮城県石造狛犬調査

調査期間：2022年8月18日～24日

調査地と成果：岩手県一戸町鳥越観音（成果：石切所石工制作狛犬の孤例の把握）・岩手県一戸町巖手山神社（成果：「石造権現さま」の実例の把握）・岩手県滝沢村岩手山神社と岩手県雫石村岩手山神社遥拝所（成果：岩手山神社型蹲踞附尾狛犬の類型確定）・花巻市土沢町鐺八幡神社（成果：花巻型長胴附尾狛犬の類型確定）・秋田県横手市十文字町新山神社（成果：大曲・横手・湯沢型狛犬の類型確定）・岩手県一関市大東町大原金鳥神社（成果：一関・平泉・奥州型長胴附尾狛犬の地域類型確定）・宮城県栗原市雄鋭神社（成果：一関・平泉・奥州型長胴狛犬の分布範囲確定）

東北地方の狛犬調査については、山崎哲男・山崎良恵ご夫妻と渡邊吉勝氏の調査による深い恩恵を受けている。山崎ご夫妻は、HP『神社探訪・狛犬見聞録・注連縄の豆知識』の編者で、全国の狛犬を踏査されてHPに掲載され、多くの貴重な狛犬や獅子像の発見がある〔山崎哲男・山崎良恵 HP〕。1例を挙げると鹿児島県南九州市の飯倉神社宋風獅子（川辺町宮）の発見があり、橋口亘氏「南九州市川辺町宮の飯倉神社現存の宋風獅子」などの研究を生んだ〔橋口 2013〕。

また渡邊吉勝氏は東北地方各県の石造狛犬を探訪・調査され、主要な狛犬をフェイスブックの渡邊氏のアルバムに掲載される〔渡邊 HP〕。狛犬の所在と分布についての知見を得ることができ、銘と法量の情報は貴重である。本稿も渡邊吉勝氏の調査の成果により、多くの狛犬の所在地と分布を知ることができた。また、本稿掲載の法量は主に渡邊氏の計測による。銘は渡邊氏の読銘に基づき、一部私の方で校勘の上、修正した。

## 4. 岩手県の石造狛犬類型

岩手県内では、以下の類型を確認した。

### ① 二戸・一戸型立狛犬

二戸市の市域は、幕末まで陸奥国に属し、盛岡藩領であった。明治維新の戊辰戦争で、盛岡藩から青森藩領となる。明治九年（1876）以降岩手県に属する。

二戸市の石造狛犬は、岩手県内唯一の立狛犬（たちこまいぬ・四足立ち狛犬）が地域類型として普

及する<sup>(4)</sup>。一戸町にも1カ所（西法寺毘沙門堂）立狛犬を確認した。

二戸・一戸型立狛犬は石工名を記す狛犬は2対のみで、二戸市北部の武内神社狛犬（二戸市堀野東側）（建立：明治二十三年寅〈1890〉九月十三日・石工：石切所村 石工 原馬之助）（図3・4）と八坂神社狛犬（二戸市金田一）（奉納：明治二十一年〈1888〉八月二十四日・石工：原馬之助）である。紀年銘を有する狛犬は4対で、共に建立は明治時代である。一戸町西法寺毘沙門堂狛犬は、建立年・石工ともに不詳であった。石切所は江戸時代に石工が多く、多く石臼を産した。盛岡築城参加の石工たちが藩主より賜った地で、上里・奥山集落の男性が石工を副業にした。

## ② 九戸・軽米型立尾狛犬

隣接する軽米町と九戸村には、軽米八幡神社狛犬（軽米町軽米）（建立：昭和五年〈1930〉十一月吉日建立・石工：不詳）と九戸神社狛犬（九戸村長興寺）（建立：大正十五年〈1926〉丙寅五月八日・石工：二戸郡一戸町 中村藤吉 作）（図5・6）が、流麗な立尾の石造狛犬で、共に県内の石工の手になる。

岩手県内の石造狛犬は、県外の狛犬が内陸部にも広く普及する。内陸部には、宮城県の様式の狛犬の他、出雲型狛犬の「座型狛犬」（永井泰氏の命名）も普及し、北前船以来の海運による他地の狛犬の伝播が、東北各県同様にみられる。また、二戸市から一戸町にかけて、浪花型狛犬<sup>(5)</sup>も「誇張型」（獸口を誇張して開口した類型・塩見一仁氏命名・小寺慶昭氏の「蝦蟇型」に相当）が、呑香稻荷神社（二戸市福岡）（参道前）（建立：安政二〈1855〉歳乙卯七月吉日）があり、これを模した狛犬に、武内神社（二戸市堀野）（南側参道）（建立：明治卅九年〈1906〉九月十三日・石工：荒谷権助）がある。

附近の青森県八戸市の長者山新羅神社と櫛引八幡神社に江戸型流尾狛犬がある（前者：建立：文政十一年〈1828〉六月吉日・石工：江戸霊岸島 本宮勘兵衛・後者：建立：天保六年〈1835〉七月吉日・石工：栗屋勘兵衛・〈霊岸島南新開居住〉・共に同一石工）<sup>(6)</sup>。前者は奉納者に八戸商人1名と江戸商人の名が4名あり、海運を通じた江戸との関係を覗う。軽米八幡神社には、地元石工制作の江戸型流尾狛犬（建立：明治卅年〈1897〉四月十五日・石工：不詳）もある。

### 孤例 1. 鳥越観音狛犬

山中の岩壁に懸造りの本堂がある鳥越観音（鳥越山岩屋寺・一戸町鳥越宮古沢）山門前の狛犬（建立：明治四十一年〈1908〉旧三月三日・石工：石切所上里 荒谷与助）（図7・8）は、二戸市石切所石工の制作だが、石切所石工制作狛犬の大部分を占める立狛犬ではなく、蹲踞狛犬である。左右共開口で、左像は首を揚げ、観音堂を望むかに見え、人面に近い附尾型の狛犬である。

## ③ 遠野型長胴附尾狛犬

遠野型長胴附尾狛犬は、胴長の体軀をもち、四肢間は彫り貫きなく、たてがみは側面に大渦の円形旋毛が左右3個ずつ彫られ、無角である。松崎観音堂狛犬（遠野市松崎町松崎）（建立：嘉永七年〈1854〉七月・石工：万之丞）（図9・10）は、建立年と石工名が揃う銘をもち、明確に判読でき、基準作である。十九世紀半ばに制作され、同型3対を認めた。



図1. 籠神社石造狛犬 (神門前・吽像) (像高: 97cm)  
※以下狛犬名称は「石造」「陶造」など材質を略す。



図2. 籠神社石造狛犬 (神門前・阿像) (像高: 97cm)



図3. 八坂神社狛犬 (右狛犬) (H: 48・L: 48・W: 32)  
※右は神祇からみて右手・参拝者からみて左手。



図4. 八坂神社狛犬 (左狛犬) (H: 42・L: 52・W: 31)  
※左は神祇からみて左手・参拝者からみて右手。

二戸・一戸型立狛犬



図5. 九戸神社狛犬 (吽像) (H: 53・L: 64・W: 29)



図6. 九戸神社狛犬 (阿像) (H: 56・L: 65・W: 29)



図7. 鳥越観音狛犬 (右狛犬) (H: 42・L: 47・W: 24)



図8. 鳥越観音狛犬 (左狛犬) (H: 42・L: 46・W: 24)

九戸・軽米型立尾狛犬



図9. 松崎観音堂狛犬 (吽像) (H: 46・L: 40・W: 22)



図10. 松崎観音堂狛犬 (阿像) (H: 47・L: 43・W: 24)

遠野型長胴附尾狛犬



図11. 遠野郷八幡神社狛犬 (吽像) (H: 56・L: 45・W: 31)



図12. 遠野郷八幡神社狛犬 (阿像) (H: 57・L: 45・W: 32)

遠野型陶造狛犬

六神石神社（ろっこうしじんじゃ）狛犬（遠野市青笹町中沢）（建立：〈推定〉嘉永七寅年〈1854〉八月十五日・石工：〈推定〉万之丞）。紀年銘は「□永七寅年」で冒頭が大きく欠損する。狛犬は松崎観音堂狛犬と同型で、同年に同石工万之丞の制作と推察できる。この狛犬は寶永七年説があるが[たくき HPb], 「七寅年」とのみ記され, 「庚」字なく, 字幅も詰まる。

倭文神社（しとりじんじゃ）狛犬（遠野市土淵町土淵）（建立：不詳・石工：不詳）は, 無銘の狛犬だが, 松崎観音堂狛犬と六神石神社の狛犬とほぼ同型である。ただ, 摩耗はこちらの方が激しい。

### 附記 1. 遠野型陶造狛犬

遠野市内に多い陶造狛犬で, 黒茶色を呈する蹲踞型狛犬である。代表的な作者に沼田三次郎がいる（現スマタ・オン・ザ・ルーフ創業者）。松崎町にて瓦製作工場を昭和十一年（1936）に創業する。遠野郷八幡神社陶造狛犬（遠野市松崎町白岩）（建立：昭和四年〈1929〉九月十五日・陶工：平野瓦工場沼田三次郎（図11・12）を制作した。他に日出神社陶造狛犬（遠野市上郷町細越佐野）（昭和四十一年〈1966〉八月十五日・陶工：不詳）・日枝神社陶造狛犬（遠野市遠野町）（昭和四十二年〈1967〉旧六月一日・陶工：不詳）がある。

### 孤例 2. 熊野神社狛犬（遠野市上郷町佐比内赤沢31地割）（建立：文化四年（1807）□月廿二日・石工：不詳）（図13・14）

人面の頭部をもつ蹲踞型狛犬である。丸目で前方やや下方を見据え, 頬を円形に膨らませ, 鬘鑠とした威厳がある。鼻は獅子鼻ではなく, 人間の鼻で, 扁平である。阿吽の区別はつけ難く, 両方とも歯を剥き出し, 左狛犬（神祇からみて左を「左狛犬」と称する。平安時代後期の『類聚雜要抄』巻四に原則を記す）は, わずかに一文字に間隙が開き, 阿像と判断できる。

四肢間は彫り貫かれず, 胴体側面の輪郭線も線刻で区切って表現する。尾は胴体に附着した附尾で, 三本房で屹立する。頭頂部は左右ともに穿孔があり, 角・宝珠が嵌められた可能性がある。建立年月日は, 補修で埋められた最下部の字刻の交差が露出し, 「文」と解読でき, 文化年間とし, 弘化年間ではないと判断した。「遠野のスフィンクス」ともいうべきユニークな狛犬である。

遠野市では孤例だが, 人面風の狛犬は隣接する花巻市に多い。

### 孤例 3. 旧金千鳥酒造稻荷神社神殿狛犬（岩手県遠野市中央通り「とおの物語館」）（図15・16）

無銘の小型石造狛犬である。現在の「とおの物語館」敷地内にある。遠野市立博物館学芸員熊谷航氏の御教示によると, 金千鳥銘柄の造り酒屋の敷地内に祭祀された稻荷神社である。この狛犬は, 宮副一郎氏が見出した。遠野市及び周辺地域に類例なく, 目下考察可能な根拠が無い。四分の一円の体躯をもち, 強固に足を台座につけて蹲踞する。眼は円形で, 阿形は小さく獸口を開け, 吽形はわずかに獸口を開くが, いずれも上前歯と舌をみせる。たてがみは木造狛犬にみるような房の彫刻がある。総じて形態も異質ながら, 周辺に類例がない神殿石造狛犬であり, 丹後半島型狛犬・肥前狛犬などと同種のカテゴリーに属し, 参道狛犬ではない。



図13. 熊野神社狛犬(右狛犬)  
(H:34・L:27・W:19)



図14. 熊野神社狛犬(左狛犬)  
(H:30・L:24・W:17)



図15. 旧金千鳥酒造稻荷神社  
神殿狛犬(吽像)  
(H:34・L:29・W:17)



図16. 旧金千鳥酒造稻荷神社  
神殿狛犬(阿像)  
(H:34・L:28・W:17)



図17. 小山田神社狛犬(吽像)  
(H:45・L:43・W:20)



図18. 小山田神社狛犬(阿像)  
(H:42・L:42・W:20)



図19. 荒神社狛犬(吽像)  
(H:52・L:30・W:53)



図20. 荒神社狛犬(阿像)  
(H:53・L:50・W:31)

宮古型狛犬〈頭部側視型〉

宮古型狛犬〈頭部側視型の発展型〉

#### ④ 宮古型狛犬

宮古市は、地元石工の手になる独自の型の狛犬がみられる。

小顔の蹲踞姿勢の狛犬で、頭部を参拝者側に横向きとする狛犬が多いが(宮古型狛犬〈頭部側視型〉)、首を直向させた狛犬は、黒森神社狛犬のみ確認したものの、宮古型狛犬とはいえない姿態であった。しかし藤原比古神社狛犬(宮古市藤原)が頭部直視型であり、この狛犬は尻上がりの構え姿勢の〈構え型〉で、頭部直視型でも構え型でも目下唯一の事例である(後述)<sup>7)</sup>。

宮古型狛犬の特徴は、眼目が円形で大きく、目立つ。小顔は体軀に比して極端であるが、後年に従い、頭部は大きくなる。頭部が標準的な大きさの狛犬に、鈴ヶ森神社狛犬(宮古市根市雲南沢)(建立:慶應四辰年(1868)三月七七日・石工:不詳)があり、後期の作例の典型である。分布は宮古市内が中心だが、丸浦正弘氏の『ほっかいどうの狛犬』によれば、北海道増毛巖島神社・舎熊神社・別荘稲荷神社などにも文政年間(1818-1831)(から文久年間(1861-1864)の可能性もある)の宮古型狛犬がある[丸浦 2007:174-176]。

江戸後期の十九世紀に活躍した石工、松太郎の狛犬は宮古型狛犬の典型で、少なくとも3対を数え

る。小山田神社狛犬（宮古市小山田）（建立：天保四年〈1833〉四月八日）（図17・18）・常安寺狛犬（宮古市沢田）（建立：嘉永元申年〈1848〉七月吉日）・赤前八幡神社（宮古市赤前）（建立：天保二卯〈1831〉八月十二日）である。

亀治（亀次）制作の狛犬が2対ある。藤原観音堂狛犬（岩手県宮古市藤原）（奉納：嘉永三年〈1850〉正月吉日）、千穂八幡神社狛犬（宮古市千穂町）（嘉永五子年（1852）五月吉日）である。藤原淳氏の御教示によると、亀治は嘉永年間（1848-1855）から明治期まで活動し、下閉伊地区各地の多数の蚕供養塔を制作した。

亀治は独特の亀形印を石造物に彫刻し、制作物は多いものの、石工集団であるとする考えや、複数の人物であるとの説があり、今後の研究の進展が待たれる石工である。

この他、市太郎の狛犬が1対と1体ある。大圓寺狛犬（宮古市川井村小国）（嘉永七天〈1854〉寅八月吉日・金蔵と合作）と崎山神社狛犬（宮古市崎山）（安政六年〈1859〉未三月十七日）である。

釜石市荒神社狛犬（釜石市定内町）（建立：〈推定〉明治四十四年〈1911〉・石工：不詳）は、「ロボットパルタ」を彷彿する極端な大眼の狛犬である（図19・20）。神社社号標と同種の叩き仕上げを施し、同年建立と推測され、距離は離れるものの宮古型狛犬末期の作例と考え得る。また、前述のように藤原比古神社狛犬（宮古市藤原）（建立：弘化四丁未年〈1847〉三月吉日・石工：不詳）（図21・22）は、宮古型狛犬の〈頭部直視型〉であり、かつ〈構え型〉であるといえ、出雲型狛犬〈構え型〉の影響か尻上がりで、無二の作例である。

## ⑤ 気仙型狛犬

気仙地方（大船渡市・陸前高田市・宮城県気仙沼市など）特有の狛犬の類型である。この命名は渡邊吉勝氏による。以下、渡邊吉勝氏の探索に基づいて訪問した[渡邊 HP]。

気仙地方は、現在の大船渡市・陸前高田市・住田町が、岩手県側で気仙郡にかつて属し（現在は住田町のみ気仙郡）、気仙沼市が宮城県側である。藩政時代はいずれも仙台藩領であった。

気仙型狛犬は、主に旧気仙郡内に分布する。この他、気仙地方の狛犬の類型に、友輔型石造（またはモルタル製）狛犬がある。

気仙型狛犬は、大きな眼と太い眉をもち、最大の特徴はシャコ貝のように波打った獣口の造形である。体軀は端正に蹲踞する。また、頭部には阿像に大振りな宝珠、吽像に角を載せるのも大きな特徴である。形態的には宝珠・角載狛犬の一種である。

気仙型狛犬は、2種類の下位類型があり、首を直向した〈頭部直視型〉と首を参拝者側に側向した〈頭部側視型〉があり、いずれも江戸期後期からある。共に頭部形状は同一で、端正に蹲踞する。

〈頭部直視型〉は、竹駒神社狛犬（陸前高田市小友町字上ノ坊）（建立：文政七年〈1824〉二月吉日・石工：不詳）が目下在銘最古で、常膳寺観音堂狛犬（陸前高田市小友町字上ノ坊）（建立：文政十三〈1830〉庚寅初秋十七日・石工：不詳）（図23・24）などがある。

〈頭部側視型〉は、目下在銘最古の狛犬は、熊野神社狛犬（大船渡市末崎町小細浦）（建立：寛政十一未歳（1799）十月□日・石工：不詳）（図25・26）である。〈頭部側視型〉は、更なる下位類型があり、



図21. 藤原比古神社狛犬(吽像)(H:33・L:36・W:19)



図22. 藤原比古神社狛犬(阿像)(H:32・L:36・W:19)

宮古型狛犬〈頭部直視型〉〈構え型〉



図23. 常騰寺観音堂狛犬(阿像)(H:84・L:73・W:33)



図24. 常騰寺観音堂狛犬(吽像)(H:87・L:75・W:32)

気仙型狛犬〈頭部直視型〉



図25 熊野神社狛犬(吽像)(H:46・L:30・W:22)



図26. 熊野神社狛犬(阿像)(H:47・L:28・W:22)

気仙型狛犬〈頭部側視型〉



図27. 不動瀧不動尊狛犬(吽像)(H:62・L:42・W:24)



図28. 不動瀧不動尊狛犬(阿像)(H:59・L:42・W:24)

気仙型陶造狛犬

昭和期に入り狛犬と台座が一体化した〈台座一体型〉を生じる。市杵島神社狛犬(大船渡市三陸町越喜来)(建立:昭和十六年〈1941〉・石工:不詳)以降,終戦の年まで制作される。

気仙型石造狛犬の分布は西北に遠野市内に2対,伊豆神社狛犬(遠野市上郷町細越)(建立:不明・石工:不詳)と平倉観音堂狛犬(遠野市上郷町平倉)(建立:不明・石工:不詳)があり,北に釜石市毘沙門神社狛犬がある(釜石市唐丹町向)(建立:不明・石工:不詳)。宮城県内では,県北部登米市の横山不動尊(登米市津山町横山本町)狛犬(建立:文政十一年〈1828〉三月二八日・石工:氣仙濱田村 石工 平吉)(濱田村は今の陸前高田市米崎町)があり,花崗岩製で,大型である。南には石巻市の釣石神社狛犬(石巻市北上町十三浜菖蒲田)(建立:不詳・石工:不詳)がある(以上いずれも〈頭部直視型〉)。西は金烏(きんからす)神社狛犬(一関市大東町大原烏神)(建立:不明・石工不明・頭部側視型)がある。

## 附記2. 気仙型陶造狛犬

気仙型狛犬の〈頭部直視型〉と同型で、素焼きの陶造狛犬である。大船渡市三陸町不動瀧不動尊狛犬（大船渡市三陸町綾里坂本字熊ノ入）（建立：不詳・陶工：不詳）（図27・28）を挙げる。

### ⑥ 友輔型狛犬

友輔型狛犬は、江戸晩期に、宮城県塩竈市の鹽竈神社（一森山）の2対の狛犬を制作した気仙沼の石工友輔（友助）（建立：文久二壬戌年〈1862〉十一月・文久三年〈1863〉三月）の狛犬の型である。

友輔以降、型を模した狛犬が昭和期まで制作され、一地方類型を成し、宮城県内の気仙沼市に点在する。阿像に宝珠、吽像に角をもつ蹲踞姿勢の附尾狛犬で、台座も縁取りされて美しい。氷上神社神殿狛犬（陸前高田市高田町西和野）（建立：慶應二年〈1866〉二月十九日・石工：気仙沼 友助）（図29・30）・黒崎神社狛犬（陸前高田市広田町）（建立：安政七年〈1860〉庚申三月十日・石工：気仙沼 友輔）が岩手県内での北限である。

## 附記3. 友輔型モルタル製狛犬

友輔型狛犬の形態をもとに、モルタルで制作された狛犬が、宮城県気仙沼市から岩手県陸前高田市まで各所みられる。代表的な狛犬に、氷上神社参道狛犬（陸前高田市高田町西和野）（建立：不詳・制作者：不詳）（図31・32）がある。

### ⑦ 一関・平泉・奥州型附尾狛犬

狛犬は狗犬（くけん）を思わせる姿態で端正に蹲踞する附尾狛犬で、岩手県内陸南部に散見される。釣山八幡神社狛犬（一関市釣山）（建立：嘉永七年〈1854〉三月十八日・石工：赤萩村石工 榮作）（図33・図34）と大門地藏堂狛犬（花泉町金沢）（建立：元治二年丑〈1865〉三月廿四日・石工：赤萩邑石工 榮作）（図35・36）が同一石工であり、建立年と石工名が揃う狛犬で、基準作に挙げる。⑨の一関型蹲踞狛犬と基本姿勢は似るが容貌が異なり、後者の共通する猫のような上唇の人字型の彫り筋がない。また、尾は附尾に限られる。浪分神社狛犬（一関市川崎町薄衣）・月山神社狛犬（奥州市衣川区松下）・於呂閉志神社（おろへしじんじゃ）狛犬（奥州市胆沢区若柳）・熊野神社狛犬（一関市中里字南白幡）（以上、建立時期：不詳・石工：不詳）など数例をみる。二重の大きな眼框が目立つ顔相は他と異なるが、黒石寺妙見堂狛犬（奥州市水沢区黒石）は「水澤 二代伎士」の銘がある。尾は3個の大きな巻毛の線刻で表現している。八雲神社狛犬（平泉町長島）（建立時期：不詳・石工：不詳）は、姿勢が長身の蹲踞型狛犬で、やや姿勢が垂直面に強調されるが、仮にこの類型に挙げた。

### ⑧ 一関・平泉・奥州型長胴狛犬

一関市・平泉町・奥州市に広範に分布する狛犬で、体躯が長胴で、尾は各種ある。この特徴は他の地方では、概ね江戸時代前期までの狛犬に多く、鑿の入る長さから、長胴になり易い。ただ、岩手県内陸南部の狛犬は、在銘では概ね江戸後期の制作である。



図29. 氷上神社神殿狛犬(吽像)(H:43・L:37・W:20)



図30. 氷上神社神殿狛犬(阿像)(H:42・L:40・W:21)

友輔型狛犬



図31. 氷上神社参道狛犬(吽像)(H:60・L:65・W:32)



図32. 氷上神社参道狛犬(阿像)(H:63・L:64・W:32)

友輔型モルタル製狛犬



図33. 釣山八幡神社狛犬(吽像)(H:48・L:45・W:26)



図34. 釣山八幡神社狛犬(阿像)(H:45・L:46・W:27)

一関・平泉・奥州型附尾狛犬



図35. 白鳥神社狛犬(吽像)(H:67・L:72・W:34)



図36. 白鳥神社狛犬(阿像)(H:67・L:72・W:33)

一関・平泉・奥州型長胴狛犬  
〈頭部側視型〉(ただし体軀は一般長)



図37. 三島神社狛犬(吽像)(H:70・L:54・W:37)



図38. 三島神社狛犬(阿像)(H:80・L:64・W:34)

一関・平泉・奥州型長胴狛犬  
〈頭部直視・側視組合型〉



図39. 金烏神社狛犬(吽像)(H:90・L:77・W:38)



図40. 金烏神社狛犬(阿像)(H:90・L:78・W:38)

一関・平泉・奥州型長胴狛犬  
〈頭部同一方向側視対偶型〉

この種の狛犬は、配置には横置きが多いが、縦置きもある。横置きは〈頭部側視型〉となり、古いものは、川内月山神社狛犬（奥州市衣川区下河内）（建立：天保十四年〈1843〉九月廿九日・石工：不詳・〈斜立尾型〉）・白鳥神社狛犬（奥州市前沢区日向）（建立：安政三年〈1856〉九月六日・石工：不詳・〈附尾型〉）（図35・36）・八雲神社狛犬（奥州市水沢区羽田町栗の瀬）（建立：文久元年〈1861〉六月十五・石工：不詳・〈附尾型〉）などである。分布は岩手県内陸南部と県境を挟み宮城県栗原市にも一部分布する。

この類型の狛犬は、参道に横置きされるが、縦置きする事例も多い。そして首の向きや尾の形などからみて、タイプが豊富である。〈頭部側視型〉がある他、三島神社狛犬（一関市萩荘中大桑）（図37・38）は、吽像が頭部直視型で阿像がやや首を横向させた〈頭部側視型〉で、異なる頭部の方向の狛犬が一对となった〈直視・側視組合型〉もある。ただ、〈頭部直視型〉を一对とする狛犬は少なく、目下熊野神社狛犬（一関市中里荒谷）（建立：不詳・石工：不詳）をみるのみである。

また、極めて興味深い事例として、一関市大東町大原地区では、金鳥神社（同町大原鳥神）（建立：不詳・石工：不詳）（図39・図40）と大原八幡神社（同町大原八幡館）（建立：不詳・石工：不詳）で、〈頭部側視型〉が対偶ともに同一方向の左前足側に側視し、片方が参道側を向き、片方が神殿側を向く。〈頭部同一方向側視対偶型〉ともいうべきタイプである。全国でかかる置き方をする地域は大原地区のみである。隣接する陸前高田市の鹿島神社狛犬（陸前高田市気仙町二日市）（建立：不詳・石工：不詳）も気仙地方では孤例だが、大原地区の狛犬と同様の構成である。作風は異なり、石工は異なるが、影響関係なしとはいえ、記録に留める価値がある。

尾の形のバリエーションは、〈附尾型〉〈斜立尾型〉〈立尾型〉があり、頭部の向きと尾の形で幾通りものパターンを数える。斜立尾狛犬の作例は、前述の川内月山神社狛犬に先立ち、花泉天満宮狛犬を挙げる（岩手県一関市花泉町花泉）（建立：天保五年〈1834〉三月十五日・石工：不詳）（図41・42）。〈附尾型〉は紫陽花の如き装飾の尾を付ける作例が多く、尾が立つと〈斜立尾型〉となる。〈立尾型〉は、附尾の房がやや立つ作例が多く、附尾型と境界が微妙な狛犬が多いなかで、檀原神社狛犬（一関市赤萩）（建立：不詳・石工：不詳）が明瞭な立尾である達磨風の容貌で、異形である（図43・44）。

檀原神社狛犬の異形は、寸胴であることにもあり、長胴とは言い難い。仮に〈短胴型〉と呼び得るタイプである。初期の白鳥神社狛犬も胴の長さは一般的である（図35・36）。前述の金鳥神社狛犬・花泉天満宮狛犬（図41・42）も、一般の同種の狛犬より胴の長さが短い。長胴という特徴が薄れた事例やこの特徴を失った狛犬もこの系統の狛犬にあり、亜種を立てる必要も今後の課題として考慮したい。なお、形態が類似する長胴狛犬に山形県米沢市の石造狛犬があるが、岩手県内陸南部からは離れる。

## ⑨ 一関型蹲踞狛犬

一関市には長胴附尾の狛犬と、端正な蹲踞姿勢を採る狛犬がある。尾は附尾からやや立ち上がった立尾が多い。他地に奥州市式内石手堰神社（しきないいわていじんじゃ）（後述）・平泉八坂神社狛犬（平泉町祇園）（建立：不詳・石工：不詳）があり、平泉町と奥州市南部に1社ずつ分布する。

このタイプは、顔相が共通し、含蓄がある。大きな丸眼で、ネコ科動物らしい人字型の上唇で、特



図41. 花泉天満宮狛犬(阿像)  
(H:44・L:76・W:23)



図42. 花泉天満宮狛犬(吽像)  
(H:55・L:84・W:24)



図43. 榎原神社狛犬(阿像)  
(H:54・L:52・W:29)



図44. 榎原神社狛犬(吽像)  
(H:53・L:52・W:26)

一関・平泉・奥州型長胴狛犬  
〈斜立尾型〉

一関・平泉・奥州型長胴狛犬  
〈頭部側視型〉〈短胴型〉〈立尾型〉



図45. 舞川菅原神社狛犬(阿像)  
(H:64・L:70・W:46)



図46. 舞川菅原神社狛犬(吽像)  
(H:66・L:68・W:36)

一関型蹲踞狛犬  
〈原型に近い個体〉



図47. 式内石手堰神社狛犬  
(阿像)(H:63・L:60・W:35)



図48. 式内石手堰神社狛犬  
(吽像)(H:70・L:60・W:35)

一関型蹲踞狛犬  
〈垂耳・立耳組合型〉

に吽形は口角が急に上り、愛嬌がある。岩手県の狛犬に多い傾向であるが威嚇感は少ない。太くて曲がった眉と獅子鼻ではない、人間のような扁平な鼻も個性がある。

頭部は神殿木造狛犬のような房があり、古典的かつ素朴である。頭部は、角が肥前狛犬のように、阿形・吽形ともに角があり、浪花型狛犬のように、阿形と吽形で耳の形を違える狛犬が多く〈垂耳・立耳組合型〉がある。阿形は垂耳で、吽形は立耳である。まさしくネコ科の霊獣としての面目躍如である。

一関型蹲踞狛犬の原型は、舞川菅原神社狛犬(一関市舞川)(寛政十一年未〈1799〉十月二十五日・石工:不詳)(図45・46)が、阿像・吽像の耳の違いを含め、よく形を留める。

式内石手堰神社狛犬(奥州市水沢区黒石町字小島)(建立:不詳・石工:不詳)(図47・48)・山目稻荷神社狛犬(一関市山目町)(建立:不詳・石工:不詳)も、〈垂耳・立耳組合型〉である。

配志和神社(はいしわじんじゃ)狛犬(岩手県一関市山目字館)(文化五年戊辰〈1808〉三月吉日・石工:不詳)も古い。耳は阿吽両像同型で〈垂耳型〉である。

#### 孤例 5. 金澤八幡狛犬 (図 49・50)

金澤八幡神社狛犬 (一関市花泉町金沢大柳) (建立: 不詳・石工: 不詳) は一関市に少ない人面風狛犬である。正面観は力士を彷彿させ、太い眉の独特の強健な表情である。胸高く彫る蹲踞型で、花巻市の狛犬に通じる。

#### 孤例 6. 伊吹神社狛犬 (岩手県一関市川崎町門崎宮畑) (図 51・52)

昨像は一般の蹲踞型、阿像が立ち上がった所謂「チンチン立ち」で両前足を揚げる全国でも孤例の希少な形態である。

#### 孤例 7. 鉄造狛犬

黒石寺鉄造狛犬 (奥州市水沢区黒石) (建立: 明治元年〈1868〉・鋳物師: 不詳) (図 53・54) は、鉄器と製鉄の地らしい狛犬である。現存する 4 対 (宮崎県高千穂神社狛犬・宮崎県向山神社狛犬〈高千穂歴史民俗資料館展示〉) と 1 体 (栃木県宇都宮市二荒山神社狛犬) の鎌倉時代の鉄造狛犬ともに、時代は下るが貴重である。

鉄造狛犬は岩手県内では孤例である。無銘だが、黒石寺の坊守様より、明治元年と御教示を頂いた。鋳物師名はなお考を待つ。

足のわらび型の線条が、萌え立つ生命力を感じて、東北の黒い森の山中に置かれた狛犬に秘められた大地の力を想わせる。

棘皮動物のような大きな「毛汙紋」(けまんもん=毛渦) や尾の巻き毛など、材質上細部の表現が難しい代わりに、雄渾さを押し出した、鋳鉄ならではの表現である。横向きの頭部も、眼部を見開き、矍鑠さが具わり、鈍く深味ある全身の艶をもつ。

#### 附記 4. 石狼

一関市・奥州市には、東北地方には比較的珍しい石狼像がある。両市に 3 カ所に分布するが、信仰は各社別系統であり、像容も異なり、同種の類型に括ることはできない。

御嶽神社 (みたけじんじゃ) 狛犬 (一関市萩荘鈴ヶ沢) (建立: 不詳・石工: 不詳) は、御嶽信仰により、神祇の眷属として石狼を配している。長い尾を後ろ足横に回し、鋭い牙をもつ獣口をもち、一見して石狼と分かる造形である。三峰神社石狼 (奥州市衣川区山口) もまた、三峰神社の神祇の眷属で、頭部と細長い尾を一見して石狼と分かる造形である。岩手県内の狼信仰は、秩父三峰神社の系統と衣川三峯神社と御嶽神社の系統などがある [下平 2022]。摺沢八幡神社狛犬 (一関市大東町摺沢) (建立: 不詳・石工: 不詳) (図 55・56) も狼系であるが、神使ではなく、狛犬である。

#### ⑩ 盛岡型宝珠・枝角載附尾狛犬

盛岡市内の石造狛犬は、個性的で、石工独創の狛犬が多い。地域類型には、盛岡型宝珠・枝角載附尾狛犬がある。



図49. 金澤八幡神社狛犬(吡像)  
(H:50・L:30・W:22)



図50. 金澤八幡神社狛犬(阿像)  
(H:47・L:27・W:26)



図51. 伊吹神社狛犬(吡像)  
(H:56・L:35・W:22)



図52. 伊吹神社狛犬(阿像)  
(H:56・L:24・W:29)



図53. 黒石寺鉄造狛犬(吡像)  
(H:125・L:100・W:60)



図54. 黒石寺鉄造狛犬(阿像)  
(H:120・L:100・W:60)



図55. 摺沢八幡神社狛犬(吡像)  
(H:75・L:40・W:22)



図56. 摺沢八幡神社狛犬(阿像)  
(H:76・L:39・W:24)

石狼



図57. 多賀神社狛犬(吡像)  
(H:45・L:35・W:22)



図58. 多賀神社狛犬(阿像)  
(H:47・L:35・W:23)



図59. 諏訪神社狛犬(吡像)  
(H:45・L:40・W:19)



図60. 諏訪神社狛犬(阿像)  
(H:48・L:40・W:18)

盛岡型宝珠・枝角載附尾狛犬

この種の狛犬は、阿形が宝珠載、吽形が枝角載で、蹲踞型であり、尾は大きな尾が臀部に貼り附く附尾型である。多賀神社狛犬（盛岡市永井24地割）（建立：文久二年〈1862〉七月・石工：不詳）（図57・58）は、阿形が宝珠を頭上に載せ、吽形が枝角を頭上に載せる。

諏訪神社狛犬（岩手県盛岡市門）（建立：明治十五年〈1882〉旧四月四日・石工：不詳）（図59・60）は、国内随一の極端な瘦身の狛犬で、台湾花蓮市碧雲寺の旧豊田神社狛犬（花蓮市壽豊郷民権街）（建立：昭和二年〈1927〉十月二十五日・石工：不詳）や山口県の二所山田神社狛犬（周南市鹿野）（建立：文化二年〈1812〉・石工：不詳）等の狛犬を除き、余り類例がない。鋭い表情と極端な身体表現で、石狼を彷彿させる。阿形が宝珠を、吽形が枝角を頭上に載せる点、多賀神社狛犬と同様の表現で、該狛犬を参考に制作されたと考えられ、両者の間に影響関係を認める。尾は多賀神社狛犬が下部中央に大きく旋毛を配し、その左右に小さな旋毛があり、小さな房が伸びる。中央の旋毛からは鮮やかに大きな花弁状の毛筋が3本方向を違えて伸びあがる。対して諏訪神社狛犬は、一本尾が炎立ち、多数の旋毛を彫刻する。

#### 孤例8. 盛岡天満宮狛犬

盛岡天満宮狛犬（盛岡市新庄町）（建立：明治三十六年〈1903〉六月・制作者：高畑源治郎）（図61・62）は、花崗岩製で、宮司様の話によれば、作者の高畑源治郎は、石工ではない。一般人が製作し、奉納した。硬い花崗岩を、相当の力技で彫る。狛犬は人面で、独特の狛犬で、力士の取り組みのように対向し、力強く蹲踞する。

この狛犬は石川啄木が「石馬」と呼び、小説『葬列』で、「石の狛」とも記し、狛犬であることを認識している<sup>(8)</sup>。

#### ⑪ 岩手山神社型蹲踞附尾狛犬

岩手山神社（滝沢市・滝沢村・雫石町）にみられる石造狛犬で、いずれも小型の蹲踞型の附尾型狛犬である。附尾型狛犬であるが、常見する長胴ではなく、蹲踞姿勢を採る。雫石町内の雫石岩手山神社狛犬（雫石町長山）（建立：文政三年〈1820〉五月・石工：武吉・友吉）（図63・64）の狛犬は、阿形が宝珠載、吽形が枝角載である。垂耳で、しかめ顔で鼻柱の皺や四肢の旋毛が深彫りされ、小型・端正ながら、力強い狛犬である。盛岡市内の多賀神社狛犬とは、同種の宝珠・枝角載の蹲踞型附尾狛犬であるが、旋毛の有無などの相違がある。滝沢市内の岩手山神社狛犬（建立：明治十丁丑歳（1877）五月吉日・石工：不詳）は、小型の蹲踞狛犬で、阿形は宝珠載であり、垂耳で、雫石遙拝所の狛犬とも通じる。岩手山山頂の奥宮の狛犬も、蹲踞狛犬で附尾型だが、宝珠・角はなく、形態はやや異なる。

#### ⑫ 花巻型長胴附尾狛犬

花巻市内の石造狛犬で、蹲踞姿勢であるが、長身で、石柱を思わす独特の形態である。一般の長胴附尾狛犬は、横に長いのが、花巻市内では縦に長い特徴をもつ。石材の形が分かる彫り込みで、前足を長く取り、後足の先端を踵で接する。頭部の形態は各社の狛犬により異なり、複数の石工が関わる。小



図61. 盛岡天満宮狛犬(吽像)  
(H:38・L:59・W:33)

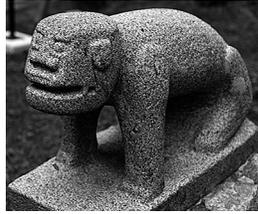


図62. 盛岡天満宮狛犬(阿像)  
(H:38・L:62・W:29)



図63. 雫石岩手山神社狛犬  
(吽像) (H:52・L:52・W:19)



図64. 雫石岩手山神社狛犬  
(阿像) (H:52・L:51・W:19)

岩手山神社型蹲踞附尾狛犬



図65. 小舟渡八幡神社狛犬  
(吽像)  
(H:73・L:29・W:33)



図66. 小舟渡八幡神社狛犬  
(阿像)  
(H:73・L:30・W:31)

花巻型長胴附尾狛犬



図67. 薬師神社狛犬(吽像)  
(H:62・L:65・W:33)



図68. 薬師神社狛犬(阿像)  
(H:63・L:66・W:35)

岩手型現代立尾狛犬

舟渡八幡神社狛犬(建立:元治二年<1865>乙丑・石工:不詳)は、頭部は人面に近い(図65・66)。

### ⑬ 岩手型現代立尾狛犬

主に昭和期に岩手県内の石工によって制作された石造狛犬で、花崗岩製が多く、立尾が多く、やや体躯が長い蹲踞型で一定の共通性が視える。志和八幡神社狛犬(紫波町上平沢八幡)(建立:不明・石工:盛岡 中村善七作)は、尾に大正・昭和期に全国に普及した岡崎型狛犬の影響がある。また、各地に地元石工制作の立尾狛犬があり、日枝神社狛犬(建立:昭和六年五月・石工:不詳)・薬師神社狛犬(花巻市土沢町)(建立:昭和十七年<1932>四月八日・石工:平野六三)(図67・68)や鳥越神社狛犬(一戸町鳥越)(建立:昭和十三年<1928>旧三月・石工:謹刻 一戸 中村)などがあり、石工各自により違いがあるが、基本的には長胴の蹲踞狛犬である。〈岡崎型立尾〉〈三本立尾〉〈一本立尾〉などの下位類型化が出来る。

### 附記5. 「石造権現さま」(石造獅子頭)

岩手県内の岩手山や薬師岳などの山岳信仰に基づく石造獅子頭で、「権現さま」と呼ばれ、木造と石造がある。神楽で最後に獅子舞があり、獅子頭を権現さまとして山の頂上近くなどに一対あるいは単体で奉納する〔司東・沼山 1975；田中 2015〕。巖手山神社の石造権現さま(二戸郡一戸町小鳥谷川底)(建立：明治四十四年〈1911〉旧正月・石工：不詳)(図69・70)は、川底集落と高屋敷集落が祭祀し、正月・村祭りに祭祀を高屋敷集落が担当する。



図69. 巖手山神社「石造権現さま」(右獅子頭)  
(H:21・L:28・W:23)  
図70. 巖手山神社「石造権現さま」(左獅子頭)  
(H:20・L:28・W:21)  
「石造権現さま」(石造獅子頭)

## 5. 結語

本論では、石造狛犬の類型分類上の命名規則を考案し、冒頭に試論として提示した。あくまで試行であり、読者諸賢の御教示・御指正を願うものである。分類上の実践例を岩手県の石造狛犬を事例に提示したが、今後各地域において、分類上の措置を新たに講じる必要が出てくることも予想される。

石造狛犬は、石工が受けた他の狛犬の影響を考慮しつつ、各作例間の関係性・継続性を把握し、各作例間の流れを念頭に類型を提示する必要があるが、類型把握のみに重点を置き過ぎるならば、逆にかかる流れの把握を阻害するだろう。つねに大局的に各作例を見通す必要があることは言を俟たない。

今後とも大局からの見通しに注意を払いつつ、全国と台湾を対象にした石造狛犬の見取り図を把握すべく、各都道府県の石造狛犬の類型調査を論考化し、集成していきたい。

謝辞：本稿の執筆と調査は、狛犬の分布と所在に関して、山崎哲男・山崎良恵ご夫妻と渡邊吉勝氏の調査による深い恩恵と啓発を受けている。銘と採寸は基本的に渡邊吉勝氏の調査に基づく。茲に特記し感謝の意を表すものである。

### 注釈

- (1) 石造狛犬の歴史を簡潔に解説する。東大寺石造獅子(建久七年〈1196〉)などの「宋風獅子」と称される中国系石獅子を除き、石造狛犬は、鎌倉時代後期に丹後半島で創出された。宮津市籠神社(このじんじゃ)の神門中に設置されたと思しき狛犬は、川勝政太郎の『日本石造美術辞典』の見解や、近年でも山下立氏が論考されるが如く、鎌倉時代後期の作との推察が有力な説である〔川勝 1978: 96; 山下 2022c〕(図1・2)。木造狛犬が主流の時代に出現した在銘狛犬最古の石造狛犬は、丹後半島の高森神社狛犬で、文和四年(1355)奉納である。籠神社狛犬を除けば、石造狛犬が神殿瑞垣外の参道に設置されるのは、概ね江戸初期からである(江戸周辺圏での現存最古は日光東照宮奥宮石段上の石造狛犬で、山田敏春氏が、寛永十八年(1641)十月から十九年(1642)四月にかけて奉納されたと推察される(阿像：奉納：松平右門大夫正綱・吽像：奉納：秋本但馬守泰朝)。
- (2) 各地の狛犬の悉皆調査は、これまで幾つかの県や地域で成果を挙げている。一例を挙げるに止めるが、中国

地方では、藤原好二氏に香川県・岡山県・尾道狛犬の悉皆調査の成果がある [cf. 藤原 2013; 2018; 2020. etc.]。

- (3) 山下立氏は、「笏谷石製狛犬の名称をめぐって (下)」において、笏谷石製狛犬について、命名された「三国湊狛犬」「越前狛犬」「白山狛犬」などの名称についての不完全さを論じ、従来の先行研究での「笏谷石製狛犬」の名称が最も理に適った命名であるとし、次のように結論される。「(前略) そしてその新名称案が、慣用語の問題点を克服し、学術用語として完成の域に達したと判断されて初めて、新たに打ち出されるべきであろう。但し、慣用語と比較しても、同じく問題点を払拭し難いものしか考案できないのであれば、慣用語の問題点を指摘するに止め、従来通りその名称に従うことが、次善ではあるが望ましかろう」[山下 2022b: 92]。
- (4) 中国では立獅子が唐代以降の皇室陵墓表神道(墓道)の石獅が立獅(りっし)・走獅(そうし)・歩み獅子を組み合わせて清代に至るが、日本では立狛犬は珍しい。弘前市内の津軽型石造立狛犬が地方類型に定着する他は、千葉県銚子市近辺にみられる。金沢市周辺に加賀型倒立・四足立組合参道狛犬は、倒立型と立狛犬を組み合わせる(加賀型狛犬は、この他別系統の加賀型神殿狛犬がある)。また、江戸獅子山と称する一種のジオラマ化した獅子像の様式に、山上の親獅子を構え獅子と立獅子を組み合わせることが多い。獅子山は、富士山噴火の溶岩の築山上に親獅子を配し、仔獅子を下方に配して、「獅子の仔落とし」(『太平記』を典故とする)を表した景観とする。現存都内最古の獅子山は、牛嶋神社獅子山(墨田区向島)(文政十年(1827)二月・石工:伊奈庄次郎正継)である。銚子型立狛犬は、江戸獅子山の獅子山を省いた形態であろう。なお、沖縄の村落守護シーサーに立獅子がみられる。
- (5) 浪花型狛犬・江戸型狛犬・出雲型狛犬の3種の狛犬が日本各地に普及した三大狛犬として知られている。浪花型狛犬は、浪花石工制作の石造狛犬を指す。様々な類型があるが、暫定的に小寺慶昭氏によって浪花狛犬として総称された名称に従う。小寺慶昭氏は、大阪府内の狛犬を次の七期、即ち「住吉型狛犬の時代」「柴島型狛犬の時代」「杭全型狛犬の時代」「上宮型狛犬の時代」「三輪型狛犬の時代」「浪花型狛犬の時代」(浪花狛犬の下位類型として「浪花型狛犬」とされる)「蝦蟇型狛犬」の時代に区分される(小寺慶昭「教材としての狛犬の研究(一)」『龍谷大学論集』総第479巻)[小寺 2012: 145-147]。本論では、このうち「蝦蟇型」のみ塩見一仁氏に倣い、「誇張型」と呼ぶ。
- 浪花型狛犬の材質は和泉砂岩と花崗岩が主流である。浪花狛犬は、九州北部を含む瀬戸内地方から東北地方まで広範に普及する。このうち青森県・岩手県でみられる浪花狛犬は、一部を除き、十九世紀以降に普及した狭義の浪花型狛犬と誇張型狛犬である。
- (6) 江戸型狛犬は、江戸初期の十七世紀より江戸市中に出現した参道設置の石造狛犬を指す。現存最古は目黒不動尊狛犬で、「承應三(1654)甲午三月廿二日」建立である(石工名不詳)。江戸時代の十七世紀中葉から十八世紀前半頃までは附尾狛犬が主流で、十八世紀前半から十九世紀初頭頃までは立尾型の狛犬が主流であった。十九世紀初頭から現在までは流尾型が主流となり、尾は左右に2束の房になって流れる。青森県八戸市の2対の江戸狛犬は流尾型である。材質は安山岩である真鶴産の小松石が主流である。長野県中部・高知県や青森県・岩手県・宮城県・福島県に江戸狛犬が、その流れを汲む狛犬がみられる。
- (7) 構え型狛犬の典型例は、全国各地に普及している出雲型狛犬が典型例である。出雲型狛犬には、座型(蹲踞型・「居獅子」と構え型(「勇み獅子」)があるが、いずれも現存最古は、松江白濁の相良門兵衛が制作したもので、座型は香川県琴平町の金刀比羅宮に天明元年(1781)六月に奉納されている。構え型は松江市東出雲町の出雲金刀比羅宮に寛政三年(1791)十月奉納されている。材質は出雲産の砂岩(来待石等)が主流である。出雲狛犬は日本海側から東北地方太平洋側の各県、及び北海道・瀬戸内地方・九州北部に広範に普及する。
- (8) 盛岡天満宮狛犬の台座には啄木の和歌を2首刻む。

夏木立中の社の石馬も / 汗する日なり / 君をゆめむ

(初載:『小天地』明治三十八年・1905)[石川・久保田 1993: 245]

松の風夜書ひびきぬ / 人訪はぬ山の祠の / 石馬の耳に

(『一握の砂』明治四十三年・1910)[石川・久保田 1993: 69]

小説『葬列』での描写を以下に引用する〔石川 2017: No. 276-No. 288〕。

「拜殿の前近く進んで、自分は圖らずも懐かしい舊知己の立つて居るのに氣付いた。舊知己とは、社前に相對してぬかづいて居る一雙の石の狛である。詣づる人又人の手で撫でられて、其不恰好な頭は黒く膏光りがして居る。そして、其又顔といつたら、蓋し是れ天下の珍といふべきであらう。唯極めて無造作に凸凹を造へた丈けで醜くもあり、馬鹿氣でも居るが、克く見ると實に親しむべき愛嬌のある顔だ。全く世事を超越した高士の倅、イヤ、それよりも一段俗に離れた、俺は生れてから未だ世の中といふものが西にあるか東にあるか知らないのだ、と云つた様な顔だ。自分は昔、よく友人と此処へ遊びに来ては、『石狛こまいぬよ、汝も亦詩を解する奴だ。』とか、『石狛よ、汝も亦吾黨の士だ。』とか云つて、幾度も幾度も杖で此不格好な頭を擲つたものだ。」

#### 参考文献（五十音順）

- 石川啄木（著）・久保田正文（編）1993『新編 啄木歌集』東京・岩波書店
- 石川啄木（著）2017〔初出：1906〕『葬列』東京・ゴマブックス〔『明星』〕
- 嘉津山清（著）1982「石造狛犬概説」『庭研』東京・日本庭園研究会：18-27頁
- 川勝政太郎（著）1965「石造狛犬の系列」史址美術同致会（編）『史址と美術』第351号：2-9頁
- 川勝政太郎（項目執筆）1978「籠神社狛犬」川勝政太郎（編）『日本石造美術辞典』東京・東京堂：96頁
- 司東真雄・沼山源喜治（共編）1975『岩手の獅子頭（権現さま）』北上・北上史談会
- 川野明正（著）2017「中国獅子像の地方類型と分布（その1）北獅篇」東京・東京都立大学人文科学研究科人文学報編集委員会：193-214頁
- 川野明正（著）2018「中国獅子像の地方類型と分布（その2）南獅篇」『人文学報』東京・東京都立大学人文科学研究科人文学報編集委員会：111-137頁
- 川野明正（著）2021「沖縄村落守護シーサーの類型分類と地域分布——シナ海石造獅子・狗犬文化圏の比較研究（4）」明治大学教養論集刊行会（編）『明治大学教養論集』通巻552号、東京・明治大学教養論集刊行会：61-88頁
- 小寺慶昭（著）2012「教材としての狛犬の研究（一）」『龍谷大学論集』総第479巻、145-147頁
- 三遊亭円丈（著）1995「THE 狛犬! コレクション——参道狛犬大図鑑」東京・立風書房
- 下平武（著）2022「民間信仰の中の動物石像——オオカミを中心にして」日本石仏協会2022年度石仏公開講座配布資料
- たくきよしみつ（文・写真）2006『狛犬かがみ』東京・バナナブックス
- たくきよしみつ（著）2020『新・狛犬学』日光・TANUPAX
- たくきよしみつ（著）HPa「狛犬分類学」『狛犬ネット』<https://komainu.net/bunrui0.htm>（閲覧日：2023年1月7日）
- たくきよしみつ（著）HPb「六神石神社と日出神社の〈誘い込んだ狛犬〉」『狛犬ネット』<https://komainu.net/iwate4.html>（閲覧日：2023年1月7日）
- 長坂一郎（著）1989「笏谷石製狛犬の形式変遷」坂本育男（編）『石をめぐる歴史と文化——笏谷石とその周辺』福井・福井県立博物館：26頁
- 丸浦正弘（著）2007『ほっかいどうの狛犬』札幌・中西出版
- 橋口亘（著）2013「南九州市川辺町宮の飯倉神社現存の宋風獅子」『南日本文化財研究』第19巻：9-13頁
- 藤原好二（著）2013「玉島石工 安田屋新藏とその狛犬」『倉敷の歴史』第26号、倉敷・倉敷市歴史資料整備室：18-30頁
- 藤原好二（著）2018「讃岐石工による出雲狛犬の模倣」『岡山市埋蔵文化財センター紀要』第10号、岡山・岡山市教育委員会：128-134頁
- 藤原好二（著）2020「徳島県における石造狛犬の変遷」『岡山市埋蔵文化財センター紀要』第12号、岡山・岡山市教育委員会：95-103頁
- 田中英雄（著）2015「南部の山の石造権現様」日本石仏協会（編）『日本の石仏』No.155、東京・青娥書房：29-34頁
- 山崎哲男・山崎良恵（編著）HP『神社探訪・狛犬見聞録・注連縄の豆知識』

<http://komainu.org> (閲覧日: 2023年1月7日)

山下立 (著) 2021 『笏谷石製狛犬の名称をめぐって (上)』史址美術同攷会 (編) 『史址と美術』第922号, 京都・史址美術同攷会: 38-48頁

山下立 (著) 2022a 「丹後半島型石造狛犬の成立と展開 — 二対の籠神社石造狛犬を中心に」『日本宗教文化史研究』通巻51号, 日本宗教文化史学会: 44-61頁

山下立 (著) 2022b 「笏谷石製狛犬の名称をめぐって (下)』史址美術同攷会 (編) 『史址と美術』第923号, 京都・史址美術同攷会: 82-96頁

山下立 (著) 2022c 「大阪府下最古の石造狛犬—丹後半島型石造狛犬の展開から見た関大明神社像」日本石仏協会 (編) 『日本の石仏』No.177, 東京・青娥書房: 26-39頁

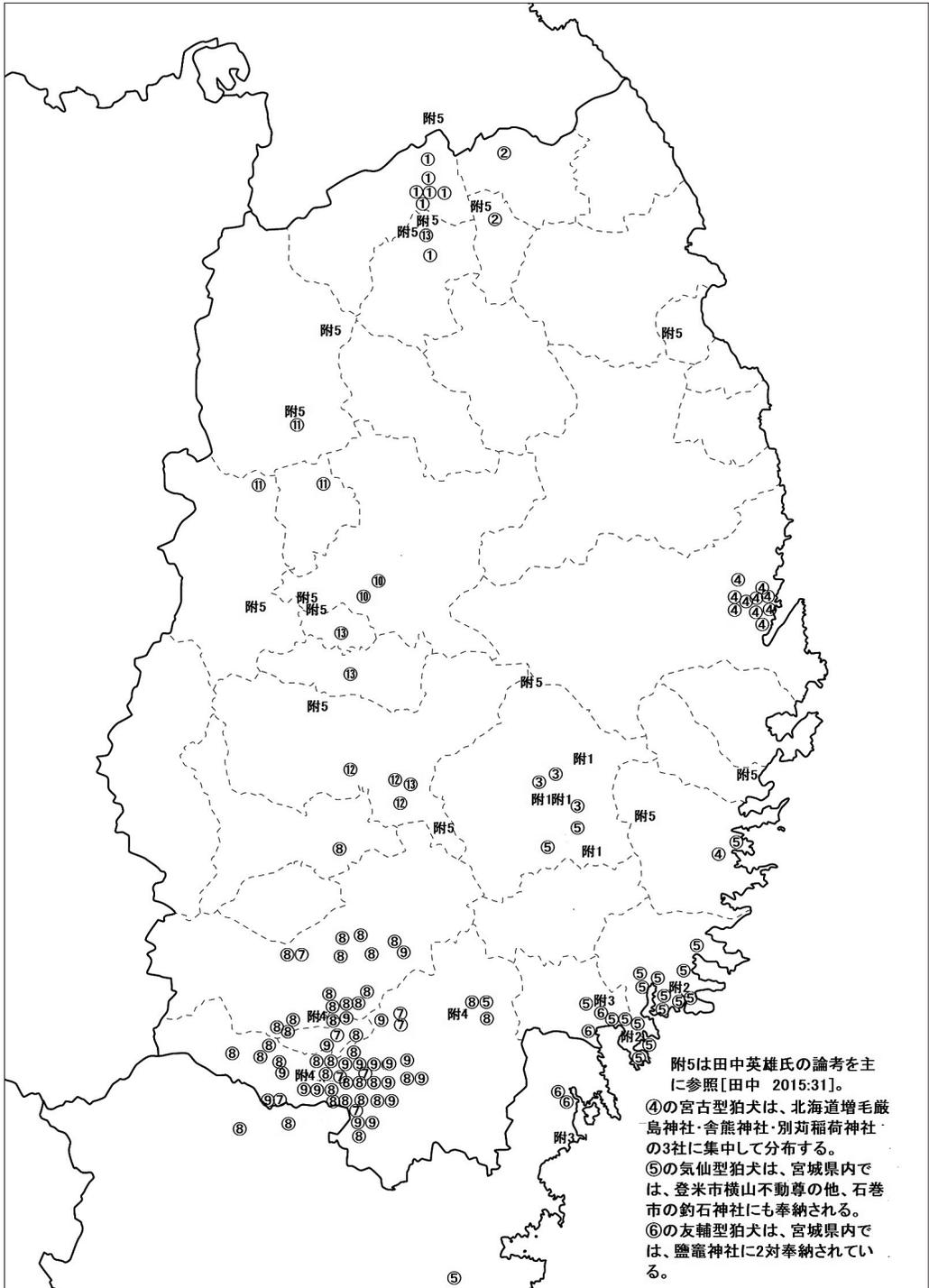
渡邊吉勝 (著) HP 「渡邊吉勝氏名義フェイスブック」内「写真」「アルバム」欄

[https://www.facebook.com/yoshikatsu.watanabe.963/photos\\_albums](https://www.facebook.com/yoshikatsu.watanabe.963/photos_albums) (閲覧日: 2023年1月7日)



地図 1. 岩手県内の石造狒犬の種類

※HP「ちずそ」[無料地図素材][「岩手県」]の白地図利用  
<http://tizuso.web.fc2.com/iwatesityouson.html>



地図2. 岩手県内石造狒犬類型の個別分布

※HP「ちずそ」[「無料地図素材」](http://tizuso.web.fc2.com/iwatesityouson.html)「岩手県」の白地図利用  
<http://tizuso.web.fc2.com/iwatesityouson.html>

※番号は地図1と本文の狒犬類型番号に対応